

物語を生きる子どもたち

—「読み聞かせ」実践報告—

佐塚公代

赤ちゃんとの静かな出会い

「お母さん、まだふくろができているだけです」。そんなうれしい報告を息子夫婦に受けてから、家族はどんなに楽しみに新しい生命の誕生を待ちわびたでしょう。か。おなかの赤ちゃんは順調に成長し、誕生の日を迎えました。

陣痛が始まると、これから父親になろうとしている息

子が夜を徹して出産の場に立ち会うことになりました。

陣痛の間隙が短くなっても、赤ちゃんはなかなか出てくることができず吸引分娩となり、立ち会っていた息子は助産師さんと一緒に引張ることになりました。もちろん息子にとっては予期せぬ出来事でした。

「生まれてきた子が青黒くて、死んでいるのかと思いました。その後で何かが出てきた。内臓が出てしまったと思います（妻が）大丈夫が心配した」。妻の長時間のお産

の進行を励ましながら、娩出と後産の分娩を自らも手伝う体験をした息子は、その時の様子をこのように話しました。

やがて産声を上げ産湯を浴びた女の赤ちゃんはカンガルーケア（註）を希望した母親の素肌に抱かれました。妊娠やお産の全ての苦勞が喜びとなる感動的な瞬間です。初乳を含ませ一時間ほど抱いた印象を母親は「なにが赤ちゃんというより、温かいものを抱いているという感じ。出産の興奮が癒され血圧も下がってきた。徐々に私の子がここにいるという、いとおしさや産んだ実感がわいてきた。とても静かな落ち着いた時間だった」と振り返っています。その後、新米の父親も「パパ・カンガルー」となり、おむつだけ当てられた小さな娘を胸に抱きました。「ぼくに似て毛深い！ 女の子なのに困った」。背中の産毛を心配してつぶやいた言葉が分娩室の笑いを誘いました。自宅で姑や一族の女年寄りに囲まれて出産した私の母や、病院と場は変わったものの男子禁

制であった私の場合などと比べると、出産形態が大きく変わったのに驚きます。

父親となった息子は、時々赤ちゃんを胸に抱き、吸引の跡が少し残った頭をなでてやりながら、静かな触れ合いをしています。まるでカンガルーケアの再現のようです。母親から、二か月になった赤ちゃんが「風と話をしていた」と聞きました。風がふつと産毛をなでたら「ウクー」と何度も呼びかけたというのです。何とゆつたりした幸せな光景でしょう。私は、こうした親子の静かな触れ合いや、感性の呼びかけの延長上に「読み聞かせ」があるように思うのです。

絵本の真の主人公たち

「読み聞かせ」という言葉や活動が最近では定着してきたように思えます。子どもの中の絵本の中に、オノマトペ（擬音語と擬態語）のみによって語られる作品や、抽象的・感覚的な絵や写真が登場するようになりました。幼い子

どもにとつては、生活にびつたり合つた言葉や物事の描かれた具体的な作品が定番でありましたが、抽象的作品も充分に楽しめます。

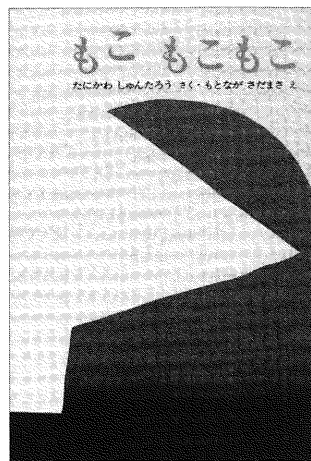
こうした分野に一歳児がどのようにかかわつたか、また小学一年生の読み聞かせの反応から見えてくるものを、事例から考察してみたいと思います。絵本は言葉と絵、綴じられたページなどによる総合的作品なので、この先は二冊の絵本を傍らに置いて、ページをめくりながらこの読み聞かせ実践報告を読んでいただけると幸いです。

◇事例1◇

一歳三か月のT君は、『もこもこもこ』（谷川俊太郎 さく・元永定正 え 文研出版 一九九三）の絵本が大好きです。家でお母さんに読んでもらうたびに、おもしろいしぐさをします。公民館の幼児教室で、お友達がたくさんいる中で、T君のお母さんのリクエストにより『も

こもこもこ』を読んだ時の様子です。

私は、絵本『もこもこもこ』を生命の誕生、成長と消滅、そして再生の物語ととらえています。「しーん」というオノマトペの響きの中で、かすかに直線上の水色が白けています。何かが起ころうとしている兆しを感じられます。ページをめくると、光を浴びて誕生した物体が周りの光を吸収し、自ら橙色になつて「もこもこ」と大きくなっていくように見えます。隣にも小さな物体が「によき」と生まれ、残っていた光を全て吸収して、けなげに伸びていきます。しかし橙色から真っ赤に



膨張した「もこもこ」は、突然周りを赤く染めて小さな「によきによき」を捕らえ食べてしまいます。自らの内に「によきによき」を取り込んだ「もこもこ」は勝利した者のように光り輝いているようです。

勝利者は小さな赤い玉を「つん」と産み出します。この「つん」が、熟れて「ぼろり」と落ちた時、読者のT君が絵本の前に歩み寄り、赤い玉を拾うしぐさをして食べ始めました。見開きのページいっぱい描かれた絵は無駄のない形であり、美しい色遣いのはっきりと物語を伝えます。幼児は、ゆったりと視点を集中させ、絵本の住人になったかのようです。さらに効果的なオノマトペの繰り返しのリズムが幼児の心に楽しさを与えるのです。絵本の主人公になり、リズムカルに「つん」を食べ続けT君を見つめていたお母さん方は、絵本と幼児のかわりに新しい発見をしたようでした。絵本は知識やしつけの道具ではなく、子どもが自由に物語との時間を生きるものなのでしょう。

絵本の中で巨大に膨れ上がった「つん」が、「ぱちん」と割れて消滅し、「しーん」と静かになるまで食べたT君が、何もなかったように静かにお母さんのひざに戻った時、絵本では「もこ」っとタイミンクよく再び何かが生まれ出るページになりました。T君は、「輪廻転生」を思い浮かべる私の解釈や楽しみ方とは違った感性で、絵本をわが物とし全身で物語の世界を生き抜く姿を見せてくれました。

◇事例2◇

学童保育に來ている小学一年生の五人と、『ふしぎなナイフ』（中村牧江 林健造さく・福田隆義え 福音館書店 一九九七）を読んだ時の子どもたちのつぶやきです。

《絵本のことば》

「ふしぎなナイフがまがる」

「ねじれる」

《子どもたちの反応》

「うん、ありえる」

「ありえる」

「おれる」

「ありえる」

「われる」

「ありえる」

「とける」

「ありえる」

「ふしぎなナイフがきれる」

「ありえる」

「ほどける」

「え！ ありえない」

「ちぎれる」

「……(絶句)」

「ちらばる」

「……(絶句)」

「ふしぎなナイフが」(テーブルの上の普通のナイフのページ)

「あ！ 元に戻った！ すごーい」

「のびて」

「うわー」

「ちちんで」

「うわー」

「ふくらんで」

「うわー」

「……」(割れた絵のページ)

「がしゃん！」

「……」(テーブルの木目の裏表紙)

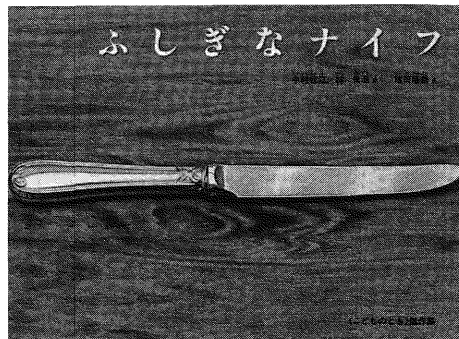
「あ！ 消えた」

「ふしぎなナイフ」はただの普通のナイフではありませ
ん。「ふしぎな」がついている限り、このナイフにはど
んなことが起こってもよいのです。「むかし、むかし、
あるところに……」で始まる昔話が、昔ならこんなことも

あつたかもしれないと
子どもを納得させるよ
うに、「ふしぎな」と
いう絵本の題名は、子
どもたちにとって魔法
をかける呪文の言葉と
なります。とても大事
な言葉ですから、丁寧
に読まなければなりま
せん。

しかし、子どもの反応を見たところ今回はすぐには魔
法がかからなかったようです。現実的、科学的に「あり
える」と意見を述べます。言い換えれば「不思議でな
い」と。

小学一年生ともなると、大人が差し出すものに対し
て、ちょっと自己主張をして自分の考えを言葉に表現し
ます。批判的とも受け取れる言葉ですが、読み手の絵本



への信頼がある限り、子どもたちの自己主張を受け入れながら読み続けると、子どもたちの自由な思考が「え！ありえない」と言葉となつて飛び出します。つまり「不思議だ！」と。ナイフが糸のようにはどけていく場面で、子どもたちの心もナイフと一緒にほだけ、批評家から絵本の世界への積極的な参加者へと変わったようでした。

それから子どもたちは自由に想像力を働かせ、ナイフが元の形で描かれたページでは、「ちぎれ」で「ちらばった」ナイフの破片が「元に戻った」ととらえたのです。このページの「ふしぎなナイフが」という最初の言葉の繰り返しを、私はワンフレーズ終わった後の新たな始まりと解釈していたのですが、子どもたちは前ページの連続であり、散らばった破片が動いて修復し、元のナイフに戻ったと感じたのです。さらに子どもたちは、最後の裏表紙も物語の続きで、割れたナイフが完全に消え去り、テーブルの木目だけが残ったと見たのでした。

おわりに

二つの事例は、読み手である私の予想を超えて、子どもの想像力が物語を能動的な喜びとし、絵本をわが物として再創造しているように思えます。子どもはこんなふうに絵本を読んでいるのだと驚きました。大人には交わすことのできない世界とも語り合える子どもたちを心から尊敬してしまいます。

こうした子どもたちの自由な想像力や感性を大切に、大人はゆつたりと寄り添っていきたいものです。絵本のページを子どもたちの心の流れに沿つてめくる風となりながら。
(けやき文庫主宰・育英短期大学)

註 保育器の不足する国の病院で、未熟児の赤ちゃんを胸元に抱っこして温めたところから始まった。保育器の足りている病院や成熟児でも、肌と肌の触れ合いを大切とし、取り入れている病院が増えていく。